

この筏式垂下法は、現在も瀬戸内海におけるカキ類の主要な養殖方法となっています。瀬戸内海にカキ筏が並ぶ風景は、瀬戸内海の人の営みを代表する風景のひとつです。



虫明湾(むしあげわん)のカキ筏／岡山県

▶ノリ類(スサビノリなど)

ノリ類の養殖は、4代将軍 德川家綱の時代(1651(慶安4)～1680(延宝8)年頃)に当時は海だった現在の東京都港区、大田区辺りで開始されたといわれています。第二次世界大戦後、さまざまな技術開発が進み、日本全国の至る所で養殖されるようになりました。

瀬戸内海はノリ養殖も盛んで、瀬戸内海に面する多くの府県で養殖が行われています。特に兵庫県と香川県の生産量が多く、有明海のある佐賀県と生産量のトップ争いをするほどの有力な生産地です。

瀬戸内海のノリ養殖は、主に「浮き流し式養殖方法」という方法で、水深の深い所に錨で固定し、海面に浮かせたロープ網にノリを張り、そこで育成します。この方法で育てられたノリ類は、紫外線が当たらないため、黒く艶があり、やや堅めなのが特長で、主におにぎり用のノリとして流通しています。秋から冬にかけて、沿岸部にはノリ網が広がり、瀬戸内海の人の営みを感じられる風景のひとつです。

近年の水質改善に伴って水質がきれいになった瀬戸内海では、ノリ類の生育に必要な栄養塩(窒素やリン)が不足し、ノリ類の色づきが悪くなる「色落ち」が問題となっています。

また、地球温暖化による海水温の上昇もノリ類が育ちにくくなっている要因のひとつです。ノリ類の種付けは毎年9～10月頃から始まりますが、海水温の上昇によって種付けできる時期が遅れ、以前は秋から冬にかけて3ヶ月ほどあったノリ類の育成期間が短くなり、今では1ヶ月程しかない年もあります。



潜り船によるノリの刈り取り／提供：姫路市立水族館

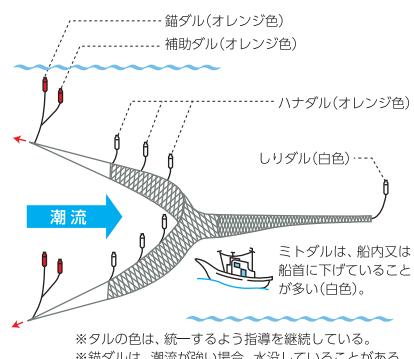
TOPIC

【瀬戸内海特有の漁法】

瀬戸内海では比較的水深が浅いため、海底地形をうまく活用した約100種の多様な漁具・漁法を駆使しながら、漁獲しています。各漁法は、沿岸や島々の地理と海洋の自然条件、そして、それぞれの魚の生態に沿うように工夫されたものでした。

瀬戸内海特有の地域的な漁法のひとつに「こませ網漁」があります。こませ網漁では、潮の流れを受けるように袋網を錨で海底に固定し、速い潮流に乗って移動するイカナゴやフグなどを待ち受け、狙って捕獲します。

広島県の鞆の浦観光網でみられる「鰐しばり網漁法」は、江戸時代より行われていた瀬戸内海の伝統的な漁法です。初夏、産卵のため瀬戸内海に集まったタイの群れを6隻の船団で取り囲み、袋網に誘い込んで網の入り口を交差させ、しばり上げるように包囲して捕獲する勇壮な漁法です。



「こませ網漁」のイメージ



変化とともにある瀬戸内海



課題と改善—変化と継続—人とともにある暮らしの海

- 近代化や高度経済成長期によって、沿岸部の開発が急速に進み、人の手で“瀕死の海”となった瀬戸内海
- 瀬戸内海の問題に対して考え方行動し、また問題が出ては解決を繰り返す、みんなで考えていく豊かな海
- 瀬戸内海をおして、さまざまな人の知恵と工夫が集まり、人の暮らしと環境保全が身近にある場所

●近代化のはじまり

明治維新以降に近代化が始まると、瀬戸内海沿岸地域では新たな産業が発展しました。1912(大正元)年に因島造船所が操業を開始し、周辺島々の重要な雇用源となりました。また海運業では、大正から昭和半ば(1912～1975年頃)にかけて機帆船が瀬戸内海の内航海運の主役となり、重化学工業の発達と鉱工業の近代化を支えました。

その一方で、銅の精錬所から排出される亜硫酸ガスによる煙害問題が深刻化し、1905(明治38)年に四国本土から約20km離れた四阪島(愛媛県)に銅の精錬所が移転しました。しかし、四阪島に移転したことで、かえって広範囲に煙害が拡がる形となりました。また、日清戦争(1894(明治27)～1895(明治28)年)や日露戦争(1904(明治37)～1905(明治38)年)時には、

中国やロシア海軍の進攻に備え、紀淡海峡の加太・友ヶ島(和歌山県)や来島海峡の小島(愛媛県)などに要塞が建設され、砲台や弾薬庫がつくられました。

こうした軍用地の中には、“地図から消された島”がありました。大久野島(広島県)には、元々数戸の住家がありましたが退去させられ、その後、日本の化学兵器製造拠点として毒ガス工場がつくられ、1929(昭和4)～1945(昭和20)年までの間、毒ガスが製造されていました。

このような戦争遺構やさまざまな“負の遺産”的には、現在でも残され、見ることができるものもあります。時代にほんろうされながらも歩まざるを得なかった歴史の上に現在の瀬戸内海の姿があることも、今後語り継ぐべき大切な地域史です。

● 高度経済成長期を支えた瀬戸内海

高度経済成長期(1960年代～1970年代)の瀬戸内海沿岸地域では、都市化と工業化が急速に進みました。瀬戸内海沿岸には、岡山県の水島コンビナートをはじめ重化学工業を中心とする大規模な工業地帯がつくりされました。沿岸域の開発にともない、各地で浅い海域の埋立てが進められ、大型船の航路を確保するための土砂と海水と一緒に吸い上げて海底を掘り下げる工事や、コンクリート骨材として海砂を採取していました。このように、瀬戸内海沿岸地域の開発は、日本の高度経済成長を支える重要な役割をもっていました。

一方で、急激な開発による都市化・産業化・人口の集中などが起こり、さまざまな環境問題も引き起こしました。沿岸地域では埋め立てにより、自然海岸が失われ、干潟や藻場などの重要な生態系が消失しました。また、工場や家庭からの排水により、海の水質汚濁が進み、富栄養化の海となり、植物プランクトンの大量発生や赤潮の発生が頻発するようになりました。プランクトンの中には有毒な植物プランクトンもいて、1972(昭和47)年には播磨灘で1,400万尾もの養殖ハ

マチがへい死(突然死)し、被害額71億円にのぼるなど、特に養殖業は大きな被害を受けました。その頃の瀬戸内海は、生態系への影響が多大なものでした。



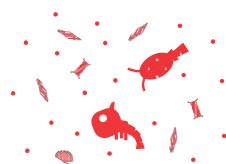
1 戦争遺構 2 工業地帯©岡山県観光連盟

● 茶色い海から青い海へ ~美しく豊かな海を目指して~

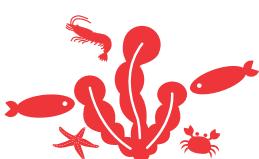
第二次世界大戦後の高度経済成長期に瀬戸内海一帯の沿岸は臨海工業地帯となり、海は汚れ、赤潮の発生が増えるなど、瀬戸内海は「瀕死の海」といわれました。このような環境悪化に対し1973(昭和48)年に「瀬戸内海環境保全臨時措置法」が成立し、環境改善に向けた取組が始まりました。それ以降、赤潮の原因となる窒素やリンなどの栄養塩類を陸から排出規制することにより、水質は改善され、赤潮の発生数は1970年代の約300件から近年では100件程度に減少しました。

瀬戸内海環境保全基本計画の変更

「瀬戸内海の水質改善」から
「地域の実情に応じた里海づくり」へ



栄養塩類の「排出規制」一辺倒から
きめ細やかな「管理」への転換



温室効果ガスの吸収源ともなる
藻場の再生・創造を後押し



瀬戸内海を取り囲む地域全体で
海洋プラスチックごみの発生抑制を推進

一方で、美しい海になったことで、栄養塩類不足によるノリの色落ち、漁獲量の減少などさまざまな課題が浮かび上がっており、「美しく見える海=豊かな海」ではないことが新たに課題としてできました。これらの課題解決に向けて、2021(令和3)年には「瀬戸内海環境保全基本計画」が水質改善のみの目標(排出規制)から水質改善に取り組みつつ、栄養塩類の管理により生物の多様性および生産性の確保や海洋プラスチックごみ発生の抑制をめざす計画へと変更されました。

●藻場の再生活動

高度経済成長期以降の沿岸の開発により、瀬戸内海の藻場、特にアマモ場の減少は深刻なものでした。

瀬戸内海沿岸の自治体を中心に、早くから瀬戸内海の生態系や水質浄化を支えるアマモ場再生の研究や取組が進められてきました。岡山県日生では、最盛期には600ha近くあったアマモ場が海底のヘドロ化によっ

て12haまで減少したことが、漁獲量の急激な減少の原因だと漁師は考え、1985(昭和60)年頃からアマモの種を採集し、撒いて育てるアマモ場の再生活動が始まりました。現在では、アマモ場再生の取組は各地に拡がり、さまざまな市民団体による再生活動やアマモ場の生きものモニタリングなどの取組が行われています。

●川の上流での植林活動

瀬戸内海が「きれいになりすぎてしまった」ことによる、漁獲量の減少やノリの色落ちなどを改善するために、ため池のかい掘りや海底に沈殿した栄養塩を掘り起こして海水中に混ぜ込む海底耕耘、藻場を増やすための肥料やり、自治体と連携した処理排水の栄養塩を増やす運用など、さまざまな取組が行われています。

なかでも代表的なのが「漁業者の森づくり」です。瀬

戸内海に流れ込む川の上流域の森林で、漁師たちが植樹や除伐、間伐などの森づくりを行っています。森林が豊かであれば、降った雨をしっかりと保水して海の濁りを抑えつつ、晴れた日には土中の栄養分と一緒に水は瀬戸内海へ流れていきます。それらが沿岸の植物プランクトンや海藻の成長をより盛んにし、海を豊かにします。

●海ごみの解決に向けて～瀬戸内オーシャンズX～

瀬戸内海で大きな問題になっているのが、海洋プラスチックごみです。特に生きものへの影響が大きく、まったくなしの状況です。

瀬戸内海に面した瀬戸内4県(岡山県、広島県、香川県、愛媛県)と日本財団は、広域の連携体制のもと、瀬戸内地域での海洋ごみ対策を進めるとともに、循環型社会を見据えた「瀬戸内モデル」を世界に発信していくことを目指し、包括的海洋ごみ対策事業「瀬戸内オーシャンズX」を発足しました。瀬戸内オーシャンズXは、2028年3月までに陸域・海域での積極的な回収と、

海域での漁具などプラスチックごみの発生抑制によって海洋ごみの減少を目指しています。



漂流ごみと鳥

TOPIC

〔住民の手で再生した島～豊島～〕

香川県小豆島の西に位置する豊島は、面積14.5 km²の島で、9,000年前の貝塚から、その頃から人が暮らしていたことが分かりました。

島の中央にそびえる^{だんやま}檜山からは湧水が出ており、古くから漁業や農業が営まれ、人々の生活を支えてきました。少雨で水不足に悩まされる離島には珍しく、島外に米を移出できるほど稲作ができ、近代に入ると酪農が栄えたことから「ミルクの島」、また戦後間もなく先進的な福祉施設がつくられたことから「福祉の島」としても知られ、その名のとおり、豊かな島でした。

1970年代から島の西端で始まった産業廃棄物の不法投棄は、1990年に摘発されるまで続き、全国的にも最大規模の産廃問題は、その後の廃棄物政策を見直すきっかけとなりました。住民たちは、産廃撤去と元の島に戻すことを求め、大変な苦労をしながら草の根の戦いを続けました。そして、2000年に公害調停の最終合意を得ました。2019年に豊島からの産廃撤去が完了し、近年は、環境の再生を目指した取組が続いている。

瀬戸内国際芸術祭の舞台となった2010年以降は、アートの島と呼ばれるようになりました。担い手不足によって休耕田となっていた棚田を住民や自治体、美術館運営団体とともに再生させ、その広大な敷地の一角に豊島美術館ができました。瀬戸内国際芸術祭では島の本来の豊かさに焦点を当て、アートと食を中心とした取組が継続して行われています。



新しい価値、未来にむけて

- 新しい風景の見方と地域を再発見する旅
- 課題から新たな発想をとりいた食の付加価値

● アートがつなぐ、島の新たな風景 ~瀬戸内国際芸術祭~



ヘザー・B・スワン+ノンダ・カサリディス「海を夢見る人々の場所」
Photo : Keizo Kioku

「海の復権」をテーマに、瀬戸内海の島々を舞台とした現代アートの祭典が 2010(平成 22)年から 3 年に

1 度開催されており、毎回、国内外から 100 万人近くの方が訪れています。訪れた人は、アートを通じて島々を巡り、アーティストや地域住民、ボランティアサポート隊と交流しながら、島の自然や歴史、文化、生活、産業、食に出会い、その魅力にふれることができます。また、これらの資源を生かしたその地ならではのアート作品やイベントを五感で楽しみ、作品をとおして、島の風景をみることができます。

そして、島々へは船で渡り、そこから眺める島の自然や暮らしの風景、穏やかな瀬戸内海の四季や時間、天候によって移ろう色や光を感じられるのも魅力のひとつです。

● 橋が生み出す新しい景観、交流

本州と四国を結ぶ瀬戸大橋にはじまり、来島海峡大橋をはじめとする 9 つの橋からなる「瀬戸内しまなみ海道」や 7 つの橋で島を結ぶ「安芸灘とびしま海道」は、四国と本州、島々への人の行き来や生活を便利にし、物流を促進しました。

島々が育んできた自然や歴史、文化を巡るドライブ・サイクリングコースとして、国内外から多くの人が訪れています。

大型橋梁は新たな瀬戸内海のランドマークにもなり、橋から眺める海と島々も新たな展望スポットとなっています。



1 橋のある風景(亀老山展望より) 2 濑戸大橋からの風景

●瀬戸内海の新しい楽しみ方

しまなみ海道・とびしま海道・ゆめしま海道サイクリング



しまなみサイクリングロードは、日本で初めての海峡を横断できる自転車道です。村上海賊が活躍した歴史と文化あふれる島々を結ぶ全長約70kmの海の道で、「サイクリストの聖地」としても知られています。橋の上から眺める海と島の風景や島で気になったお店や場所に寄り道したり、海岸などでのんびりしたり、また、あいさつをきっかけに地元の人と交流できるなど、その地域を身近に感じられるのも魅力です。

●学ぶ旅

ジオ・ガストロノミー

近年、その土地の気候や風土が生んだ食材・習慣・歴史、それらによって育まれてきた食を楽しみ、食文化にふれることを目的とした「ガストロノミーツーリズム」が注目されています。

そうした中、ガストロノミーに地域の大地の成り立ち(ジオ)の視点を加え、香川の食とジオとのつながりをひも解き、新たな価値の発信を目指して「せとうち讃岐ジオ・ガストロノミーツーリズム研究会」が立ち上りました。例えば、香川県の代表的な郷土食・讃岐うどんの成り立ちを読み解くと、大地の大変動の産物であることがみえてきます。うどんに欠かせない塩の誕生は、瀬戸内海の基盤である花崗岩が風化したマサ土と瀬戸内海の潮汐を利用した塩田がかかわっています。また、うどんの原料の小麦は、地殻変動で隆起した四国山地や讃岐山脈が原因で生じた温暖少雨の瀬戸内海式気候とマサ土でできた水持ちの悪い扇状地による水不足に対応するために、乾燥に強い小麦を栽培したという先人たちの知恵と努力の結晶です。

漁業体験

多様な魚類が生息する瀬戸内海では、約100種の漁具・漁法があります。広島県大崎上島では「刺網」、兵庫県家島では「底引き網」の漁法を体験できます。また、採った魚介類の調理体験もあり、豊かな海の恵みを実感できます。

カヤック、SUP(スタンドアップパドルボート)

自分の手でこぐカヤックは、実際に潮流や海風を感じられ、手こぎ船の頃の人たちと同じような目線の風景を眺めることができます。無人島でランチやカフェをするコースもあります。

瀬戸内海の島々を巡るクルージングやヨットでは、自分の時間を楽しみ、非日常を体験できます。



地域食とジオとのつながりをひも解くジオ・ガストロノミーは、“ここにしかない”食文化の成り立ちと魅力を知り、再発見するとともに、地域のアイデンティティとシビック・プライド(地域に対する住民の誇りや愛着)を育てるにもつながります。

都市山・六甲

神戸市など大都市に隣接する六甲山は、瀬戸内海を通じて伝來した仏教との結びつきが強く、古くから山岳修行の靈地として扱われ、また、上質な花崗岩の産地でもありました。明治時代以降は居留外国人によってレクリエーションの要素が持ち込まれ、現在でも多くの人に親しまれる近代登山発祥の地といわれています。

今では樹林が広がる六甲山ですが、江戸時代には樹木の伐採によってはげ山となり、明治以降の大規模な植林によって緑を取り戻した山でもあります。地域の間に自然保護の気運が高まった昭和40年代以降、緑化や植樹といった緑豊かな六甲山の自然を守る取組が盛んとなり、今でも続けられています。

● 食の新しい価値

▶ みかん鍋

みかんの産地として周防大島を知ってもらうため、町の観光協会と農業協同組合が、みかんと地魚を組み合わせた料理を考案したのが、みかん鍋です。

しかし、みかんを入れると実が崩れてしまったり、苦味が出たり、なかなか思うようにいかず、試行錯誤の末、香りもよく苦味を抑えることができる焼きみかんを浮かべる鍋に辿りつきました。

みかん鍋を開発した当初は、「みかんを鍋に入れるなんて非常識だ」と、みかん農家からの声もあったそうです。地元学校でのみかん鍋実践やイベントでのみかん鍋のふるまいなどを積極的に行い、今では、周防大島の名物鍋となっています。

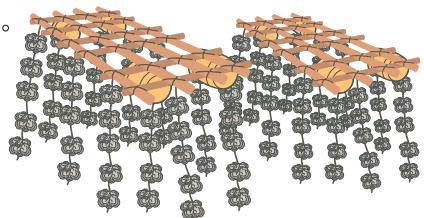


[みかん鍋の4つの定義]

- ▶ 「鍋奉行御用達」の焼き印が押されたみかんが入っていること
- ▶ みかんの果皮を練り込んだ地魚のつみれを入れること
- ▶ みかん胡椒と青唐辛子が入っていること
- ▶ 鍋のシメはメレンゲを使った淡雪みかん雑炊にすること

▶ カキから農作物へ 里海米

岡山県では、カキ養殖から出る膨大な量のカキ殻の処理が課題でしたが、カキ殻に含まれる豊富なカルシウムやミネラルなどの特性を生かし、粉末状にして田畠の土壌改良材に使用しています。そこで誕生したのが、里海米です。



● 私たちが考えていくこと



瀬戸内海の島々には、過去に歴史的な負の遺産や都会から不要なものが持ち込まれた時代がありました。その後のさまざまな取組により、現在では多くの人にぎわい、新しい価値が生まれ、活性化している場所も見られるようになりましたが、変わらず課題が残る場所もあります。

瀬戸内海の島々の魅力的な景観を目にしたとき、私

たちは何を感じ、何を考えるでしょうか。豊かさとは何か。これから在り方とは? それらを考えるきっかけとなるのが、瀬戸内海の島々であり瀬戸内海なのかもしれません。

「どんな瀬戸内海にしたいか」「どんなふうに暮らしたいか」を想像し、課題解決にむけて、これからもみんなで考えていきたいです。



[参考文献]

【第1章 暮らしがある国立公園】

- ＜日本の国立公園、瀬戸内海国立公園の誕生に大きく関わった2人の父＞
- リレー・シンポ「輝ける讃岐人」『第4回・内海の価値を訴えた人々』RSK山陽放送公式チャンネル YouTube (<https://www.youtube.com/watch?v=XaeBdWhHgHM>)。
 - ＜欧米人が賞賛した瀬戸内海の風景～シーカンジン～＞
 - 西田正憲（1999）「瀬戸内海の発見 意味の風景から視覚の風景へ」。中公新書。
 - 掘繁（1993）「瀬戸内海国立公園の誕生 - 備讃瀬戸と鷲羽山の発見 -」。国立公園協会 国立公園 516号、瀬戸内海研究会。
 - 山口徹編（2001）「街道の日本史 42 瀬戸内諸島と海の道」。吉川弘文館。
 - ＜日本人が賞賛した瀬戸内海の風景～パノラマ景～＞
 - 西田正憲（1999）「瀬戸内海の発見 意味の風景から視覚の風景へ」。中公新書。
 - 掘繁（1993）「瀬戸内海国立公園の誕生 - 備讃瀬戸と鷲羽山の発見 -」。国立公園協会 国立公園 516号、瀬戸内海研究会。
 - 山口徹編（2001）「街道の日本史 42 瀬戸内諸島と海の道」。吉川弘文館。

【第2章 瀬戸内海の成り立ち 地形 地質が語る】

- 大地の成り立ちとシワ、つかの間の海～キーとなる5つの時代～
- 巽好幸（2022）『『美食地質学』入門 和食と日本列島の素敵な関係』。光文社。
 - 瀬戸内海の成り立ち～瀬戸内海は海なの？陸なの？～
 - ＜地形からみる瀬戸内海＞
 - 巽好幸（2022）『『美食地質学』入門 和食と日本列島の素敵な関係』。光文社。
 - ＜大地の成り立ち～瀬戸内海を特長づける5つの時代と地質学的できごと～＞
 - 長谷川修一（2022）「総合誌『瀬戸内海』83号 地形と地質から見た瀬戸内海の成り立ちと特徴」。公社 瀬戸内海環境保全協会。
 - 瀬戸内海歴史民俗博物館（2023）「連続セミナー『5つの視点から瀬戸内を見る』」。
 - 風景をつくる～花崗岩由来の代表的な風景～
 - ＜瀬戸内海の多島美＞
 - 小豆島町文化財保存活用地域計画、小豆島町
 - ＜白砂青松＞
 - 山口徹編（2001）「街道の日本史 42 瀬戸内諸島と海の道」。吉川弘文館。
 - ＜ジオと食のつながり セトウチ讃岐ジオストーリー～なぜ讃岐はうどん県になったか～＞
 - 讃岐ジオパーク構想推進準備委員会「讃岐ジオパーク構想推進準備委員会 ホームページ」(<https://sanukigeo.org/>)。

【第3章 瀬戸内海の生態系と生きもの】

- 瀬戸内海のさまざまな環境と生きもの
- 環境省「藻場とは」。セトウチネット 瀬戸内海の環境保全と創造をめざして (https://www.env.go.jp/water/heisa/heisa_net/setouchiNet/seto/g1/g1chapter3/mobahigata/mobatowa/index.html)。
 - 大阪市立自然史博物館編（2017）「第48回特別展解説書『瀬戸内海の自然を楽しむ』解説書」。株式会社春日。

- 西元俊典・小沢康甫・橋口環・土肥安紀子編（2007）『瀬戸内海事典』。南々社。

＜砂浜＞

- 環境省「干潟とは」。セトウチネット 瀬戸内海の環境保全と創造をめざして (https://www.env.go.jp/water/heisa/heisa_net/setouchiNet/seto/g1/g1chapter3/mobahigata/higatatowa/index.html)。

- 水産庁「干潟の働きと現状」。水産庁ホームページ (https://www.jfa.maff.go.jp/j/kikaku/tamenteki/kaisetu/moba/higata_genjou/index.html)。
- 大阪市立自然史博物館編（2017）「第48回特別展解説書『瀬戸内海の自然を楽しむ』解説書」。株式会社春日

＜干潟＞

- 環境省「干潟とは」。セトウチネット 瀬戸内海の環境保全と創造をめざして (https://www.env.go.jp/water/heisa/heisa_net/setouchiNet/seto/g1/g1chapter3/mobahigata/higatatowa/index.html)。

- 水産庁「干潟の働きと現状」。水産庁ホームページ (https://www.jfa.maff.go.jp/j/kikaku/tamenteki/kaisetu/moba/higata_genjou/index.html)。
- 大阪市立自然史博物館編（2017）「第48回特別展解説書『瀬戸内海の自然を楽しむ』解説書」。株式会社春日

＜沿岸の森林＞

- 赤木太（2018）「瀬戸内海のシンボルスナメリの生態（魚の話シリーズ69）」。総合誌『瀬戸内海』75号。（公社）瀬戸内海環境保全協会。

- 牛窓ウォータートレイル「瀬戸内海のはなし」。牛窓ウォータートレイルホームページ (<https://www.watertrail.com/tips/setonaikai.html>)。

- 東川洸二郎（2019）「カブトガニの人工飼育（魚の話シリーズ71）」。総合誌『瀬戸内海』77号。（公社）瀬戸内海環境保全協会。

- 環境省「藻場・干潟の状況」。セトウチネット 瀬戸内海の環境保全と創造をめざして (https://www.env.go.jp/water/heisa/heisa_net/setouchiNet/seto/g2/g2cat01/mobahigata/index.html)。

＜瀬戸内海の大切な生きもの＞

- 赤木太（2018）「瀬戸内海のシンボルスナメリの生態（魚の話シリーズ69）」。総合誌『瀬戸内海』75号。（公社）瀬戸内海環境保全協会。

- 牛窓ウォータートレイル「瀬戸内海のはなし」。牛窓ウォータートレイルホームページ (<https://www.watertrail.com/tips/setonaikai.html>)。

- 東川洸二郎（2019）「カブトガニの人工飼育（魚の話シリーズ71）」。総合誌『瀬戸内海』77号。（公社）瀬戸内海環境保全協会。

- 環境省「藻場・干潟の状況」。セトウチネット 瀬戸内海の環境保全と創造をめざして (https://www.env.go.jp/water/heisa/heisa_net/setouchiNet/seto/g2/g2cat01/mobahigata/index.html)。

【第4章 歴史・文化と暮らす】

- ＜段々畑と柑橘類栽培＞
- 西元俊典・小沢康甫・橋口環・土肥安紀子編（2007）『瀬戸内海事典』。南々社。
 - 公益社団法人瀬戸内海環境保全協会（2019）「瀬戸内海における水環境を基調とする海文化」。公益社団法人瀬戸内海環境保全協会

- 愛媛県「なぜ美味しい？愛媛のみかん」、愛媛県の公式観光サイトいよ観ネット
(<https://www.iyokannet.jp/feature/mikan/reason>)、
<塩づくり>
- 広山堯道（1968）「赤穂塩業史」、赤穂市。
- 公益財団法人塩事業センター「日本の塩づくりの歴史」、塩百科
(<https://www.shiojigyo.com/siohyakka/made/history.html>)、
<石の島・石工文化>
- 西元俊典・小沢康甫・橋口環・土肥安紀子 編（2007）「瀬戸内海事典」、南々社。
- せとうち備讃諸島日本遺産推進協議会「日本遺産ストーリー」、
せとうち石の島（<https://stone-islands.jp/>）。
- <造船業>
- 西元俊典・小沢康甫・橋口環・土肥安紀子 編（2007）「瀬戸内海事典」、南々社。
- 山口徹（2001）「街道の日本史 42 瀬戸内海諸島と海の道」、
吉川弘文館。
- 海運から見た瀬戸内海～人・物・文化を運んだ海の路～
<航路として発展した歴史>
- 公益社団法人瀬戸内海環境保全協会（2019）「瀬戸内海における水環境を基調とする海文化」、公益社団法人瀬戸内海環境保全協会
- 山口徹（2001）「街道の日本史 42 瀬戸内海諸島と海の道」、
吉川弘文館。
- <風待ち、潮待ちの港>
- 西元俊典・小沢康甫・橋口環・土肥安紀子 編（2007）「瀬戸内海事典」、南々社。
- 牛窓ウォータートレイル「瀬戸内海のはなし」、牛窓ウォータートレイル ホームページ
(<https://www.watertrail.com/tips/setonaikai.html>)、
<村上海賊>
- 来島海峡展望館 展示資料
- 村上海賊魅力発信推進協議会、日本遺産 村上海賊 公式お守パンフレット
- 西元俊典・小沢康甫・橋口環・土肥安紀子 編（2007）「瀬戸内海事典」、南々社。
- 村上海賊魅力発信推進協議会「日本遺産 村上海賊」、村上海賊
魅力発信推進協議会ホームページ
(<https://murakami-kaizoku.com/>)、
<北前船>
- 西元俊典・小沢康甫・橋口環・土肥安紀子 編（2007）「瀬戸内海事典」、南々社。
- 北前船日本遺産推進協議会「北前船とは」、北前船寄港地・船主集落 KITAMAE
(<https://www.kitamae-bune.com/about/main/>)、
<いまに残る風景>
- 西元俊典・小沢康甫・橋口環・土肥安紀子 編（2007）「瀬戸内海事典」、南々社。
- 公益財団法人日本交通公社「金刀比羅宮」、公益財団法人日本
交通公社 美しき日本 全国観光資源台帳
(<https://tabi.jtb.or.jp/res/370014->)。
- 濱戸内・海の路ネットワーク推進協議会「信仰の路としての瀬戸内海（神社仏閣および金毘羅）」、瀬戸内・海の路ネットワーク推進協議会 ホームページ
(<https://www.uminet.jp/know/detail.php?id=26>)。
- 濱戸内海歴史民俗資料館 テーマ展示案内「板子一枚下は地獄 -瀬戸内海の海難-」、香川県（<https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/setorekishi/exhib/pro20190913.html>）。
- 四国新聞社「第 37 話 金毘羅信仰の源流（中）神聖な海域『塩飽の海』」、四国新聞社 金刀比羅宮 美の世界
(<https://www.shikoku-np.co.jp/feature/kotohira/story/37.html>)。
- 大崎上島町地域協議会「權伝馬」、大崎上島 伝統文化 權伝馬
(<http://kaidenma.jp/kaidenma/index.html>)、
<鬼を“迎える”祭>
- 日本遺産 鬼が仏になった里「くにさき」ホームページ
(<https://www.onie.jp/>)。

- 瀬戸内海の魚介がおいしい理由
<瀬戸（海峡）と灘が生む高速潮流>
- 翔 好幸（2022）「『美食地質学』入門 和食と日本列島の素敵な関係」、光文社。
 - <地形と潮流がもたらした海の幸>
 - 翔 好幸（2022）「『美食地質学』入門 和食と日本列島の素敵な関係」、光文社。
 - 西元俊典・小沢康甫・橋口環・土肥安紀子 編（2007）「瀬戸内海事典」、南々社。
 - 瀬戸内海の海底における底質分布図：翔 好幸
<養殖漁業>
 - 瀬戸内海の代表的な漁法：高松海上保安部「備讃瀬戸の安全通航のために 4. 備讃瀬戸の代表的な漁法」海上保安庁ホームページ
(https://jtsb.mlit.go.jp/kaiken/kaiken20230328_s5.pdf)。
- 【第5章 変化とともににある瀬戸内海】
- <茶色い海から青い海へ～美しく豊かな海を目指して～>
- 環境省（2022）「瀬戸内海環境保全基本計画概要」、環境省報道発表資料「瀬戸内海環境保全基本計画」の変更の閣議決定について（<https://www.env.go.jp/content/900518527.pdf>）。
 - 環境省水・大気環境局水環境課 閉鎖性海域対策室（2022）「瀬戸内海環境保全計画の変更について」、総合誌「瀬戸内海」83号、（公社）瀬戸内海環境保全協会。
 - <藻場の再活動>
 - 相生湾自然再生学習会議ホームページ「アマモ場づくり」
(<https://aoiwan.com/amamo/>)。
 - アマモサミット・ブレワークショップ 2006 要旨集
(https://www.amamo.org/archives/A-summit_PWS_3+4.pdf)。
 - ふるさとおこしプロジェクト（JR 西日本）
(<https://www.jr-furusato.jp/magazine/11465/>)。
 - 瀬戸内 Story（日生諸島・牛窓）※環境省事業
(https://chushikoku.env.go.jp/procure/topics_00088.html)。
 - <川の上流での植林活動>
 - NPO グリーンズ WEB マガジン「greenz.jp」
(<https://greenz.jp/2024/09/20/hyogo-gyoren/>)。
 - Frau SDG'S
(<https://dowellbydoinggood.jp/contents/project/209/>)。
 - <海ごみの解決に向けて～瀬戸内オーシャンズ X～>
 - 瀬戸内オーシャンズ X「瀬戸内オーシャンズ X 概要」、瀬戸内オーシャンズ X ホームページ
(<https://setouchi-oceansx.jp/overview#problem>)。
 - NPO 法人 豊島観光協会「豊島について」、豊島観光ナビ
(<https://teshima-navi.jp/>)。
 - <住民の手で再生した島～豊島～>
 - NPO 法人瀬戸内オリーブ基金、廃棄物対策豊島住民会議、豊島応援団 島・島の学校 豊かな島と海を次世代へ ホームページ「豊島事件を見る」
(<https://www.teshima-school.jp/struggle/>)。
 - 新しい価値、未来にむけて
 - <アートがつなぐ、島の新たな風景～瀬戸内国際芸術祭～>
 - 瀬戸内国際芸術祭実行委員会「瀬戸内国際芸術祭とは」、瀬戸内国際芸術祭ホームページ
(<https://setouchi-artfest.jp/about/mission-and-history.html>)。
 - <学ぶ旅>
 - 高松市公式観光サイト Experience Takamatsu 「【讃岐ジオ・ガストロノミ】地球の大地の変動が生んだ唯一無二の香川・高松の食」
(<https://www.art-takamatsu.com/jp/travel/sightseeing/entry-970.html>)。
 - 香川大学ホームページ(プレスリリース)「地域のアイデンティティとシビック・プライドを強化する「せとうち讃岐ジオパーク構想推進シンポジウム」開催」(<https://www.kagawa-u.ac.jp/32651/>)。
 - 六甲山ビジターセンターホームページ
(<https://rokkasan.center/history>)。

[出典]

【第2章 瀬戸内海の成り立ち 地形 地質が語る】

- <大地の成り立ち～瀬戸内海を特長づける5つの時代と地質学的できごと～>
- p.10 西南日本の地質構造図：磯崎 行雄、川勝 均、佐藤 薫編（2023）、「高等学校 地学」、p178、啓林館
 - p.10 瀬戸内火山岩類が侵食された残丘の地形と内部構造：「おむすび山なぜ多い？専門家に尋ねた」、朝日新聞デジタルホームページ（<https://www.asahi.com/articles/ASP4W7GJYP4HPTLC02M.html>）

【第3章 瀬戸内海の生態系と生きもの】

- <瀬戸内海の大切な生きもの>
- p.18 瀬戸内海のスナメリの呼び名：牛窓のスナメリを見守る会「瀬戸内スナメリ名前事」、牛窓のスナメリを見守る会ホームページ（<https://beautiful-setonaikai.jp/sunameri/nickname/>）。

【第4章 歴史・文化と暮らし】

<塩づくり>

- p.20 「入浜式塩田」での塩づくりの様子（赤穂市）：赤穂市歴史博物館編（2020）「日本遺産認定記念 令和二年度特別展 播州赤穂の塩づくり」、赤穂市立歴史博物館、p90。
 - p.20 入浜式塩田での塩づくりのイメージ：赤穂市歴史博物館提供資料を元に作成。

<風待ち、潮待ちの港>

 - p.23 江戸時代の瀬戸内海航路：牛窓ウォータートレイル「瀬戸内海のはなし」、牛窓ウォータートレイルホームページ（<https://www.waterrail.com/tips/setonaikai.html>）。
 - p.23 橋漕ぎ船：伊万里市役所「昭和の波多津 映像・写真展 06 ろ漕ぎ」、伊万里市ホームページ（<https://www.city.imari.lg.jp/18150.htm>）。
- <北前船>
- p.25 明治期～大正期の北前船の港：北前船日本遺産推進協議会「北前船とは」、北前船日本遺産推進協議会ホームページ（<https://www.kitamae-bune.com/about/main/>）。

- p.25 北前船の航路：のと里山空港利用促進協議会「能登半島北前船ものがたり」、能登観光ポータルサイト のとねっと（<https://notohantou.net/archive/other/rekishi/1st/>）。

<いまに残る風景>

- p.27 広島神社奉納難船絵馬：瀬戸内海歴史民俗資料館「板子 - 枚下は地獄 - 瀬戸内海の海難 -」、香川県ホームページ（<https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/setorekishi/exhib/pro20190913.html>）。

- p.28 権伝馬：大崎上島町地域協議会「フォトギャラリー」、上崎大島伝統文化 権伝馬（<http://www.kaidenma.jp/garally/index.html>）。

<瀬戸内海の魚介がおいしい理由>

<瀬戸（海峡）と灘が生む高速潮流>

- p.29 潮の干満が伝わる時間を示した図：巽 好幸

<養殖漁業>

- p.31 規則的に配置された海苔網（兵庫県明石市沖）：毎日新聞大阪写真部X（<https://twitter.com/maiosakashashin/status/1626385730825244672>）。

【第5章 変化とともにある瀬戸内海】

<茶色い海から青い海へ～美しく豊かな海を目指して～>

- p.34 環境省（2022）「瀬戸内海環境保全基本計画概要」、環境省報道発表資料「瀬戸内海環境保全基本計画」の変更の閣議決定について（<https://www.env.go.jp/content/900518527.pdf>）。

<海ごみの解決に向けて～瀬戸内オーシャンズX～>

- p.35 瀬戸内海における海洋ゴミ収支：瀬戸内オーシャンズX「瀬戸内オーシャンズX概要」、瀬戸内オーシャンズXホームページ（<https://setouchi-oceansx.jp/overview#problem>）。

(ウェブサイトの参照日：2025/3/23)

発行日 2025年3月

発行元 環境省 中国四国地方環境事務所

編集作成 株式会社地域環境計画



Setonaikai National Park

リサイクル適性(A)
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

2025年3月発行